

News Letter いいき・がく

Bunkyo Center for Education and Research

2019 March No.003



教育研究推進センター長・ご挨拶

このたび、教育研究推進センターニュースレター第3号を発行するにあたり、教育研究推進センター長としてご挨拶申し上げます。

一昨年度、本学教員による地域連携活動を支援すべく、ニュースレター第1号を発行いたしました。前センター長である椎野信雄先生の第1号におけるご挨拶にありました様に、ニュースレターの愛称とした「いいき・がく(域・学)」は、総務省の地域づくり活動で「域学連携」という用語が用いられています。今年度は、文学部の鈴木健司先生に『「文教大学市民フォーラム」を実施して』という論題で、情報学部の岡野雅雄先生に『湘南総合研究所の地域連携活動「田んぼプロジェクト」について』という論題でご執筆いただきました。どちらも越谷および湘南キャンパスで実施されている地域連携事業でございます。ご精読いただきますようお願い申し上げます。

今年度、教育研究推進センターが実施した重要な事業として、「研究倫理教育の実施」があげられます。昨年6月に、先生方に次の様な依頼をいたしました。

「本学では、研究機関に対して研究倫理教育の確実な実施と研究者倫理の向上を求めた平成26年8月26日文部科学大臣決定「研究活動における不正行為への対応等に関するガイドライン」に対応するため、専任教員については平成27年10月からCITI Japan eラーニングプログラムによる研究倫理教育の受講をお願いしているところです。また、同ガイドラインでは定期的な研究倫理教育の実施が求められており、本学では3年ごとに受講のご案内をすることとしています(平成29年2月2日 大学審議会にて報告のとおり)。また、これまでの3年間で当該教材にもいくつかの改訂が行われております。これらを踏まえて、今後は3年ごとに研究倫理教育再受講の年を設定し、本学における研究倫理の維持・向上を図っていきたくと考えておりま



教育研究推進センター長

中島 滋

す。平成30年度は本学におけるeラーニングプログラム導入から4年目にあたりますので、前年度までに受講を完了している先生方におかれましても改めて研究倫理教育を受講いただきますようご理解・ご協力をお願い致します。」

現在(平成31年1月末)、約90%の先生が研究倫理教育を受講し、終了されています。年度末までには受講・終了率が100%になると思われます。先生方のご協力に厚く御礼申し上げます。

また昨年度に引き続き、研究に関しては、科学研究費補助金(科研費)等外部研究費獲得の推進、そのためのサポート体制の充実を行いました。今年度は、越谷、湘南両キャンパスにおいて、「科研申請書類のピアレビュー」を行いました。この事業は次年度も行いたいと考えております。外部研究費の取得に関しては、科研費補助金申請数100件、採択率50%を目指したいと考えております。さらに、FD・SD活動の推進として、両キャンパスにおいて、研修会(大学教育における今日的課題～学習障がい等への対応、ダイバーシティなど～、授業改善のための学生・教職員懇談会)を開催しました。これらの研修会は年々参加者が増加しており、本学において、FD・SD活動が定着してきました。この活動においては、両キャンパスの教育研究推進センター次長(豊口先生、日吉先生)の地道な努力があることを申し添えさせていただきます。

最後になりましたが、今後も教育研究推進センターの活動にご理解とご援助をいただきますようお願い申し上げます。私の拙い挨拶とさせていただきます。

「文教大学市民フォーラム」を実施して

文学部 鈴木 健司

今年度の文教大学市民フォーラムは、文学部が主担当ということで文学部日本語日本文学科長の鈴木が、企画立案することになった。メインテーマを「ぼくたち、わたしたち、英語を話せるようになるのだろうか?」とし、サブテーマを「小学校英語の教科化(2020年)を契機に考える」とした。200名という定員に対しそれを超える多くの市民の方々にご参加いただき、9月8日(土)、文教大学越谷キャンパス13101教室にて実施された。シンポジストは3名で、英語が話せない代表として鈴木、英語が自由に話せる代表として渡辺敦子先生、ネイティブスピーカーの代表としてグラハム児夢先生が担当した。それぞれが30分ずつ発表し、残りの20分を質問時間に当てた。質問用紙を受付時に配布し、休憩時間に回収、それをもとに多くの方々からの質問を採り上げ、3人のうちの誰かが答えるというかたちをとった。質問時間を多めに確保したことは好評であった。

今回の文教大学市民フォーラムのもう一つの目的は、「日本における英語教育の検証」である。英語力について、日本はアジア諸国の中で「読む・書く・聞く・話す」の4領域すべてにおいて最低ランクに位置付けられている。特に「話す」ことにおいてはアジア諸国の中で最下位という現実を、鈴木が各種データをもとに提示し、今後の日本における英語教育のあり方について、渡辺、グラハム両先生から、提案がなされた。

2020年度から小学校第5・6学年において英語が教科化されるが、英語を話せない小学校の先生方は、自身が受けてきた日本式の英語教育(暗記型・グラマー重視型)が指導上のベースになってしまうかもしれないし、中学校・高等学校で

も教育現場側で特別な意識改革がなされなければ、今後しばらくは大きな変化は難しいのかもしれない。

本フォーラムは、日本の英語教育、また文教大学の今後の課題について、ご参加の皆さんと共有し、ともに考え、意見交換することにより、文教大学でのよりよい学びの実現と、社会に求められる人材の輩出について、考えを深められたことに感謝したい。

各大学には、学生・社会の多様なニーズに応えつつ、教育の質を保証・向上させていくことが求められ、そのために、大学それぞれの人材養成の目的等を明確化するとともに、その実現に向けた努力が不可欠となる。教員養成に強い大学として広く社会に知られる文教大学にとって、小学校英語の教科化を目前に控え、さらにその後の社会を思い浮かべると、教員養成を担う上ではもちろんのこと、社会へ人材を輩出する大学として英語教育を充実させることは大きな課題であると考えている。

今回このフォーラムに参加してくださった皆さんはもちろんのこと、これから新たに英語に接することになる小学生の皆さんとご指導に当たる先生方に、何らかのエールとなつたとすれば、これに勝る喜びはない。

余談になるが、私はこの企画の内容を深めるため、年末年始とお盆休みを利用し、それぞれ2週間ほど、海外の英語学校に入学した。悪戦苦闘の2週間であったが、自身の英語力の現実と向き合うことができ、また責任転嫁するわけではないが、自身の受けてきた英語教育に対する疑問が明確となった。何より、社会の中での自分自身、英語がうまく話せない私と改めて向き合うという貴重な体験であった。



2018年度文教大学市民フォーラム

湘南総合研究所の地域連携活動 「田んぼプロジェクト」について

情報学部 岡野 雅雄

湘南総合研究所は「地域社会への貢献」を目的の一つとして掲げており、近隣の茅ヶ崎市・藤沢市との連携事業をいくつか行っております。その中から田んぼプロジェクトについて紹介させていただきます。

田んぼプロジェクトとは

「田んぼプロジェクト」は、茅ヶ崎市を拠点に環境・エネルギーや資源材料分野で世界的な活動を展開している株式会社アルバック（ULVAC）が、企業の地域貢献、社会的責任活動（CSR）を進める一環として、茅ヶ崎市の休耕地を復活させるために2010年に始めた活動です。同社に管理委託された、行谷地区での水田・畑でのコメやその他の野菜作りを行っています。その初年度には、まず田んぼ1枚をよみがえらせ、稲の収穫をすることができました。その成功を踏まえ、休耕地の近隣にある文教大へも参加の呼びかけをさせていただきました。そのときから、文教大側の参加の窓口の役割を湘南総合研究所が受け持つこととなりました。

このプロジェクトは、文教大学にとっては大学と地域・企業とのコラボレーションを通じた、キャンパス内での勉強と実社会での体験を結びつける試みであり、学生はこのプロジェクトへの参加を通じて、「自然（田んぼ）と付き合う」、「地域と付き合う」、「企業と付き合う」という有益な体験をすることができ、カリキュラム外活動のひとつとして、食糧問題や日本の農業問題、環境問題、企業のCSR、地域づくり、またボランティア活動一般など、学生の意識向上に資することが期待できます。

このプロジェクトは、順調に発展してゆき、現在は9年目（文教大参加8年目）となりました。この間に、耕作地は約

5倍に拡大しています。稲作の他に野菜も少しつくっております。

主なイベントと時期

以下のイベントを通して、稲作のサイクルをひととおり経験することになります。

田起こし（4月）→田植え（5月）→草取りを兼ねた自然観察会（7月）→稲刈り（10月）→脱穀→収穫祭（12月）

これらは、アルバック社員のご家族が参加する賑やかで楽しいイベントです。農作業をしつつ田んぼの周りの植物、昆虫等を観察します。また、文教大生は、大学から田んぼへ往復する中で、田んぼの周りの川や植生が、文教大学や里山公園と連続体を形成していることに気づくことになります。イベントへは子供たちの参加も多いのですが、文教大の学生は、お兄ちゃん・お姉ちゃんとして良い遊び相手にもなっています。一方、学生は、年長のアルバック社員の方々の企画力・行動力・協調性など、ふだんプロとして厳しく働いている企業人の優れた姿を目にし、自分たちが社会への一歩を踏み出すときに向けて感化を受ける機会ともなっています。

このような主イベントの他に、「スタッフイベント」として、地道な作業が入り、それによってこそ稲作が成り立っていることを学生は知ります。たとえば、モグラの掘った穴を埋める、水流の管理、草取り、雀対策など。これらのたいへんな作業は、アルバックスタッフや地主さんが行っておりますが、興味のある学生はスタッフイベントの一部にもお誘いを受けて、加わることがあります。

今後の展望

これまでの推移から、さらに耕作地を拡大することが見込まれ、また、収穫物を用いた食品づくりにも新たな企画を次々に試みることで、「食」について考える機会ともなることが期待されます。



学内研修会参加者の声

FD・SD研修会「大学教育の今日的課題～学習障がいを持った学生の対応とダイバーシティなど～」に参加して

教育学部 **成田 奈緒子**

FD・SD研修は短時間の中で行わなければならない制約があるため、全部を詳しく知るといえるのではなく、参加者が「興味を持つ」だけで十分成功だと思います。なぜなら、現代は情報ツールが多く存在するので、興味さえ持てば、個々人が学習を深める方法はいくらかもあるからです。その意味では今回、実際に日常的に発達障害や学習障害のある学生に関わっている神奈川LD協会の山内信重先生と越谷校舎Bルームの佐藤和子さんからの発表は大成功だったと思います。専門家である私でも、「へえ」「なるほど」と思うこと、「じゃあ、これは、あれはどうなんだろう？」と疑問に思うことがたくさん持てた研修でした。出席した教職員はとてもラッキーだったと思いますし、このような研修を地道に繰り返すことも重要だと考えます。ありがとうございました。



越谷校舎事務局 **佐藤 理乃**

日々の業務において障害を持つ学生の支援について考えることがあり、このたびの研修会では有意義な時間を過ごすことができた。「学習障がい」をキーワードとし、大学教育の現状と越谷校舎での支援状況を比較することで、今後どのような支援体制を整えていくべきか考えを深めるきっかけとなったからである。まずは、教職員が障がいについて学ぶことが必要であると思う。その際には今回のように、専門家を招いて意見交換をし、ひとりで抱え込まないような体制を整えると学びやすいと感じる。今後は、困っている状況を周囲へ伝えられない学生の場合、どのようにアプローチをしていくか考えていきたいと思う。

FD・SD研修会「授業改善のための学生・教職員懇談会」に参加して

湘南校舎事務局 **石山 哲夫**

平成30年12月19日に実施された“授業改善のための学生・教職員懇談会”に参加させていただき、学生の皆さん及び先生方と「学びのモチベーション、教えるモチベーション、それを支えるモチベーション」について共に議論ができたことは、たいへんに有意義であった。

限られた時間ではあったが、率直な意見交換が出来たと思われる。特に学生の皆さんからの忌憚のない意見は、身に沁みるものであった。それぞれの立場において「授業」に対するモチベーションの持ち方が異なることは当然であり、学生及び教員の方々と接するなかで、私たち事務局職員の重要な役割は、“円滑な橋渡し”ではないかと考えている。モチベーションを保つこととは、即ちストレスを如何に軽減したうえで「学ぶ」「教える」「支える」が三位一体となる事ではなかろうか。

今後も可能な限り改善策を提案し、三者のモチベーション向上を目指すと共に付随する課題や問題点についても、継続的に意見交換をしていくことが必要であると再認識した。

